

ねぎ生育期に注意したい病害虫

令和5年3月 大里農林振興センター

1 黒腐菌核病 (写真1)

- 【発生時期】 秋～春期
(平均気温が20℃を下回る時期)
- 【発病適温】 10～20℃
- 【感染経路】 被害残さや菌核からの土壌伝染
- 【症状】
生育不良や外葉の黄化が起こり、葉鞘部に白いかびを生じた後、黒変・腐敗する。被害部に黒色・球形で小さな菌核を形成することから黒く見える。



写真1 黒腐菌核病の被害株とほ場の様子
〔HP 埼玉の農作物病害虫写真集〕より

【薬剤対策】 図1 ねぎ生育期における黒腐菌核病防除の農薬処理例

作型	3～5月頃	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
年内～年明けどり	農薬処理① 育苗期後半～定植直前 パレード20フロアブル 苗箱灌注 又は その他薬剤	農薬処理② 9月 中旬頃 土寄せ直前	農薬処理③ 10月 下旬頃 土寄せ直前	農薬処理④ 12月中旬頃 土寄せ直前	農薬処理⑤ 2月 土寄せ直前			
年明け以降～2月どり								
3月以降どり								
初夏どり	処理間隔 約1か月～1か月半		処理間隔 約1か月～1か月半		農薬処理① 育苗期後半～定植直前 パレード20フロアブル 苗箱灌注 又は その他薬剤	農薬処理② 2月下旬～3月上旬頃 土寄せ直前		

2 萎凋病 (写真2)

- 【発生時期】 育苗期から定植後15～60日に多く発生する
- 【症状】
下葉が湾曲、黄化、萎凋し、被害株は茎盤部が褐変する。本病に侵されると、高温期に軟腐病を併発することが多く、腐敗部にネダニが寄生することも多くなる。



写真2 萎凋病による茎盤部の維管束の褐変

【薬剤対策】 定植前に薬剤防除する (表1 参照)

3 ネダニ類

- 【発生時期】 春～秋
(気温が20～25℃程度の初夏、初秋に多く増殖する)

【症状・特徴】

乳白色、0.7mm程度の小さな卵型のダニで、ねぎの地下部に寄生して加害する。寄生の多い株は地上部の生育が悪く、根がほとんどないため、簡単に引き抜ける。



写真3 ネダニ類

【薬剤対策】 土寄せ前に粒剤・株元灌注・株元散布で、薬液を根元までしっかり届ける

4 ネギハモグリバエ

【発生時期】 4月頃～10月頃
(梅雨明け以降に多発する)

【症状・特徴】

従来と異なるB系統の幼虫が、5～10匹ほどで葉内を集中的に食害し、葉全体が白化する。

産卵～羽化までの日数が、20℃で35.7日、25℃で23.3日と気温上昇で短くなる。



写真4
ネギハモグリバエ
成虫と食害で白化
した葉の様子



夏期までに対策しないと薬剤防除が追いつかなくなるよ！



さいたまっち

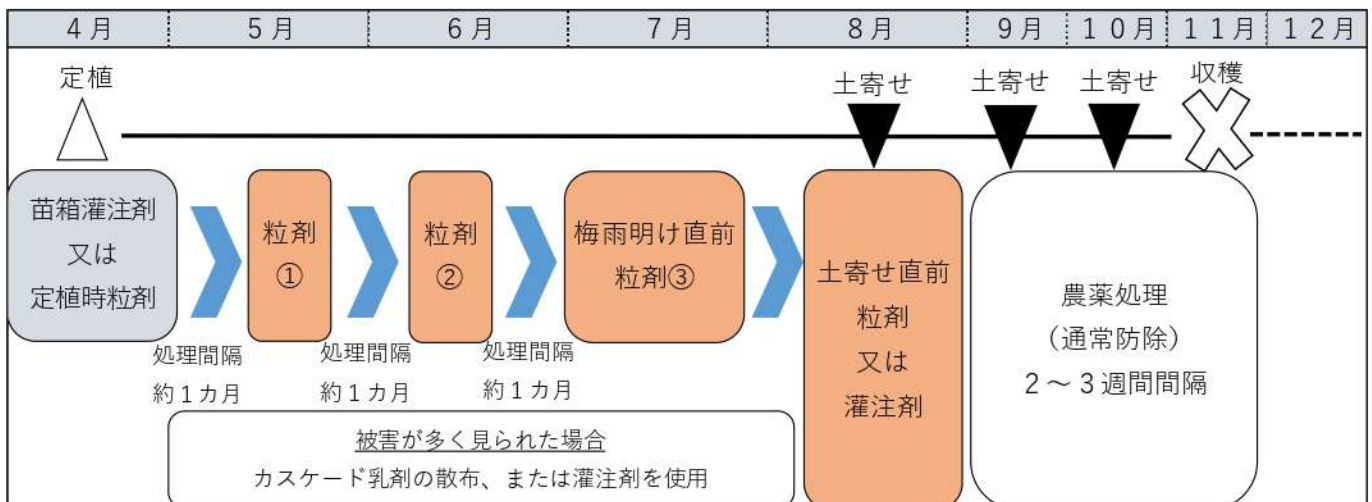
【薬剤対策】発生初期の薬剤防除を心がける

多発してからの防除は難しいため、梅雨入りまでに防除を一度行う。また、夏期にはほ場をよく観察し、食害痕や成虫を見かけたらすぐにローテーション散布する。

※効果的にネギハモグリバエを防除するためには、生育初期～夏期まで天敵へ影響の少ない薬剤を選択することを推奨する。

図2 4月定植作型でのネギハモグリバエ防除の農薬処理例

(大里農林振興センター「ネギハモグリバエバイオタイプBの防除試験結果について」より)



※薬剤の使用時期・回数は、ねぎの作型や害虫の発生具合に応じて調節する。

5 薬剤以外の防除対策

- (1) 収穫機やトラクタ等に付着した土を他のほ場に持ち込まない
(土中の病原菌が伝染源になるため)。
- (2) 残さをほ場外に持ち出してビニル等で覆うなど適切に処分する
(被害株に形成された菌核や残さに寄生した害虫が伝染源になるため)。
- (3) 輪作や緑肥を作付けし、連作を避ける。
緑肥(イネ科やカラシナ等)は作付け・すき込むことで、次年度の発病抑制効果が得られる。特にカラシナはすき込み後に発生するガス成分が黒腐菌核病に対して高い発病抑制効果を発揮する。

ネギネクロバネキノコバエの防除について



写真5 集団で加害する幼虫（茎盤部：左、葉鞘部：真ん中）、激発し坪枯れとなったねぎ（右）
（「ネギネクロバネキノコバエ防除マニュアル」より）

1 ネギネクロバネキノコバエ（以下ネギネ）の生態

- 【成虫】 3月中旬頃～12月上旬に発生し、主に歩行により移動する。
- 【幼虫】 ネギの茎盤部や葉鞘部（軟白部）を好んで寄生し、集団で食害する。激しくなると外葉が枯れて生育が悪くなる。ねぎやニンジン、ダイコン、ニラ、雑草なども食害し、ねぎや雑草に寄生して地中で越冬する。
- 【発育】 多湿環境を好み、約8℃以上で発育する。
発育期間は約27日で、年間6～7世代発生する。

【発生消長】

成虫のピーク

6～7月

9～11月

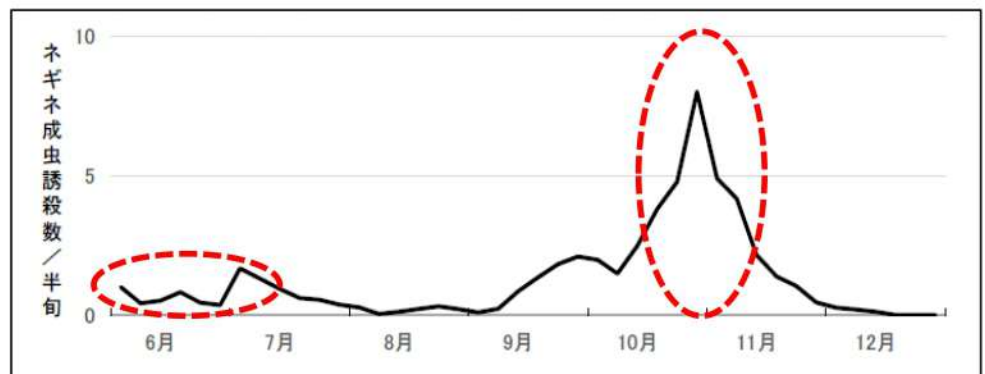


図3 ネギほ場におけるネギネ成虫の発生消長（2019-2022 平均値）

（「令和4年度埼玉県農業技術研究センター試験研究成果発表会より抜粋」）

幼虫のピーク

9月以降に増加する



図4 ネギほ場におけるネギネ幼虫寄生数（2016年）

（「ネギネクロバネキノコバエ防除マニュアル」より）

2 対策方法

(1) 薬剤防除

3週間間隔を目安に薬剤散布を行い、特に土寄せ前までを重点的に行う。
(土寄せ後は軟白部まで薬剤が浸透しにくい)

図5 ネギネ防除の農薬処理例（「ネギネクロバネキノコバエ防除マニュアル」より）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
中旬	下旬	下旬	中旬	上旬	下旬	中旬	上旬	下旬	中旬
	定植 △ フォース粒剤				土寄せ ▼ スタークル(アルパリン) 顆粒水溶剤	土寄せ ▼ カスケード乳剤	土寄せ ▼ デミリン水和剤		収穫 ✕ ベストガード水溶剤
	ベストガード水溶剤	カスケード乳剤		デミリン水和剤			ベストガード水溶剤		

効果的な使用方法①「スタークル(アルパリン) 顆粒水溶剤」の株元灌注

直接の殺虫効果と、殺虫成分がねぎに吸収され植物体内を移行すること(浸透移行性)による長期間の効果が期待される。

ネギネ幼虫の生息場所(茎盤部・葉鞘部)へ薬液が届くよう規定量をしっかり灌注する。
散布液量の目安：**1mのねぎにつき 900ml**

(条間 90 cmの場合)



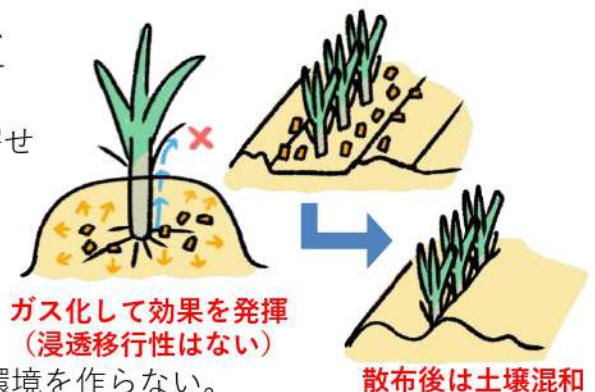
効果的な使用方法②「スタークル(アルパリン) 粒剤」の株元散布

上記の灌注処理が困難な場合に、粒剤を株元散布し密度抑制を図る(浸透移行性)。乾燥時には効果が不安定になる可能性があるため、使用のタイミングに注意する。

効果的な使用方法③「フォース粒剤」の株元散布

土中でガス化することで効果が発揮されるため、土壌表面へ散布するだけでなく、土壌混和や土寄せ作業を併せて行うこと。

使用時期に注意する(収穫前30日まで)。



(2) 排水対策をする

明きょ等の排水対策を行い、ネギネの好む多湿環境を作らない。

(3) 周辺作物・雑草の管理

周辺作物の防除、除草を行い、寄生場所を無くす。

(4) 残さ処理

被害株や残さが発生源になるため、ほ場外に持ち出し、1か所に積み上げてビニル等で覆うなど適切に処分する。ほ場にすき込む場合は石灰窒素等を施用し、早期に腐熟させる。